

在韓日本人のノンフィクション作品から見る韓国生活

—民主化前から韓流前まで—

今里 基（立命館大学）

1. はじめに

本報告は 1970 年代から 1988 年のソウル五輪前における在韓日本人の生活を扱ったノンフィクション作品を対象に、在韓日本人¹の生活や韓国人との関わりの特徴を整理する。それを通じて韓流ブーム後に在韓日本人の韓国観がどのように変化したのかを検討する入口として、この時代の彼/彼女らの韓国での韓国人との接触・交流を通じた、韓国人と日本人へのまなざしの変化について考察する。

サイードは『オリエンタリズム』(1993)にてヨーロッパ人による東洋の文化や風俗に対する後進的、従属的なまなざしを批判的に検討した。本報告でも日本人の韓国人に対する見方の変化を検討するため、サイードの議論を援用する。

1965 年の日韓国交正常化後に来韓した在韓日本出身者の先行研究は、在日コリアンの母国留学によるアイデンティティの変化、文化的な葛藤や日韓ダブルの子ども言語戦略に関する研究を中心に蓄積がなされてきた (cf. 임영언・이화정 2013、松樹 2020、川端 2020)。一方で、韓国における日本人の生活そのものに関する研究はそれらと比較すると少ない (cf. 아사다 2009)。特に 2003 年以降のいわゆる韓流ブーム前に来韓した日本人が韓国の地でどのような生活をし、また韓国に対していかなる感情を抱いていたのかについては十分な整理や分析がなされていない。他方で 1965 年以降、多くの在韓日本人が自らの韓国における生活を綴った書籍を日本語で出版している。多様な出版物が出されているが、本報告では、特派員や学者などの専門的な知識に則して書かれた書籍ではなく、留学生や駐在員の妻などによる等身大の体験を綴った自伝やノンフィクション 6 冊を中心に検討する²。それを通じて、現在よりも韓国人に対するオリエンタリズム的なまなざしが強かった日本人の現地の韓国人との接触によるまなざしの変化が生じたことを指摘する。

2. 文献の概要

6 つの文献の著者の当時の立場を大別すると、留学生（日高、戸田、筒井）、駐在員妻（小野田、渡邊）、現地採用（長澤³）である。具体的な出版年や滞在期間は表の通りである。

¹ 本報告では韓国に居住する在日コリアンを包括する場合は在韓日本出身者を使用し、韓国に居住する日本人のみを指す場合は在韓日本人という用語を使用する。

² 駐在員や研究者が著した文献は黒田 (1985 他) や四方田 (1987 他) など多数あるが、時局の政治を追った内容や学術的な分析を含んだ部分が一定の割合を占めているものもあるため、これらを含めた分析は今後の課題としたい。

³ ただし、長澤は現地企業に顧問として採用されており、立場や収入については日本人駐在員に近いと推定される。

表 本報告で扱う在韓日本人の書籍の詳細及び著者の滞在期間

著者名	出版年	タイトル及び出版社名	著者の韓国滞在期間
小野田美沙子	1988	『ワンダーランドソウル』ちくま文庫	77 年 1 月～79 年 9 月
日高由仁	1989	『新村スケッチブック』新宿書房	81 年 4 月～87 年 10 月
長澤洋	1988	『びっくりのんびり韓国暮らし』草思社	83 年～不明
戸田郁子	1988	『ふだん着のソウル案内』昌文社	83 年 12 月～現在
筒井真樹子	1991	『ソウルのチョッパリ』亜紀書房	87 年 3 月～88 年 6 月
渡邊真弓	1999	『韓国のおばちゃんはえらい！』昌文社	94 年 11 月～96 年 10 月

※順番は著者の韓国滞在期間順に並べている。

滞在期間は概ね 1 年強から 3 年(日高は 6 年半)である。なお戸田はのちに韓国人男性と結婚し、現在も韓国に在住している⁴。その他の特徴として筒井、渡邊、長澤は移住前に直接的な韓国とのかかわりを持たず、残りの者は学生時代や社会人生活で韓国語や韓国との仕事に能動的に関わった経験がある。以下、次章ではそれぞれ立場は異なるものの、韓国で長期間暮らし、韓国人と関わっていく中で自身の韓国に対する考え方を変化させていった様子を例示する。

3. 韓国人へのまなざしの変化

3-1. 関係の捉え直し

戦前、日本は朝鮮半島を植民地にした。戦後長い間韓国に移動した日本人が戦前の支配の結果として、いわゆる「反日」的な感情を意識しながら暮らしたのは言うまでもない。しかし生活する中で、必ずしもそうとはいえない場面に遭遇し、捉え直しを意識するきっかけを持つことがある。例えば、小野田はある日相乗りでタクシーに乗車した際、日本人だと気づいた運転手から植民地時代のことで批判され、涙をする。しかし同乗していた年配女性が「彼女には責任がない」と運転手を諭したことで、最後には運転手と女性から「韓国で楽しくお過ごしください」と言われた経験をしている⁵。いくつかの書籍にはこうした韓国人との草の根のかかわりを通じて、国レベルでの関係とは異なる、韓国人と日本人との関係を考え直す記述が散見される。また韓国人の友人の「日本は嫌いだ」という言葉にショックを受けて韓国を知ろうと思い留学した戸田は、同じ学科の韓国人と公害問題について議論した際、「韓国はまだ遅れているから、そこまで手が回らない」という言葉に違和感を覚えた。それと同時に、自分がかつての侵略者の立場にいたことを振り返り、複雑な心境になる。複数の書籍には、経済的な優位性を軸に韓国を見ていたことへの自省や、日韓の経済的優位性をめぐり複雑な反応をする韓国人への思いが綴られている。

3-2. 日本人に対する批判的なまなざし

韓国生活を通して自身の韓国に対する奢りや無知を自覚し、日本人に対して批判的なまなざ

⁴ 戸田(2012)

⁵ 小野田(1988)pp. 176-177

しを持った者もいる。例えば、筒井は景福宮前で記念撮影をする日本人修学旅行生らが日の丸のバッジをつけていたことに衝撃を受け、日本人観光客の無知さを嘆き、日本の新聞に投書をするという行動に出た⁶。また長澤は出張に来た日本人男性が風俗の女性を一晩どころか朝の食事、さらには通訳だといって仕事先まで連れまわしているということに、韓国人がプライドを傷つけられていないか危惧する心境を記している⁷。その他日高は日本語ができる韓国人女性に間違えられたことで、その立場を追体験した。日高は日本のテレビ局の通訳兼レポーターの仕事をし、大衆的な食堂で料理を注文したが、スタッフの分は出るが、いつまでも自分の分だけが出てこない。後にその原因はお金で男性と付き合う商売の韓国女性と勘違いされ、提供する必要がないと判断されていたからだとわかる。この当時韓国語ができる日本人女性という発想が韓国人になく(多少発音がおかしくても田舎の人と思われていた)、そのような女性は上述の職業に限られるというのが世間の認識だった。そのような原因は長澤の例にあるような日本人男性の存在と考えられるが、図らずも日本人女性である日高は韓国人女性でないことを反論できず、複雑な心境に陥る⁸ということがあった。以上の事例は、日本人の韓国人に対するコロニアルな感覚や無理解、またその結果としての韓国人の日本語商売をする女性に対する冷たいまなざしがこの時代には存在していたことを示している。

3-3. 自らの無自覚に対する反省

先述した戸田の留学の動機は自らの韓国に対する無自覚がきっかけであったが、住むようになってから気づかされるケースも見られる。渡邊は記者だった夫と子どもと共に、リトル東京ではない庶民的な街に住みたいという理由でソウルの西橋洞のアパートに住むことにした。その大家は90年代前半に60代であり日本語が堪能な女性であった。一家が引っ越した後、ある年に韓国の独立運動記念日(3月1日)を迎えた際、ひな祭り(3月3日)が近かったこともあり、大家の女性に「ご存じかも知れませんが」とひな人形を見せる機会があった。すると彼女は記憶違いで国民学校で毎日拝んでいたと語った。それに対し渡邊は簡単に謝ることも無神経な行為だと考え、言葉がうまく出ず、「これを見てね、小さな子供のときのそのまんまの気持ちになったね」という言葉に圧倒されるだけであった⁹。

4. 考察

以上の70年代後半からソウル五輪前後までの事例からは、彼/彼女らが韓国生活を通じて、対人距離の在り方や食文化といった違いだけでなく、互いの国(や人)に対するステレオタイプのイメージや無自覚さ、オリエンタリズム的な理解に接近し、それまで自分が持っていた「まなざし」を自省し、韓国人あるいは日本人に対するまなざしを変化させ、そこから日韓の歴史的な

⁶ 朝日新聞 1987年11月11日付朝刊5面「胸に日の丸で訪韓は無神経」

⁷ 長澤(1988)pp. 66-67

⁸ 日高(1989)pp. 201-202

⁹ 渡邊(1999)pp. 78-81

関係性にも考えを広げていく姿勢が垣間見られる。

報告者は、こうした姿勢やまなざしの変化がソウル五輪後、特に韓国に対する情報が多数流入するようになった 2003 年の韓流ブーム以降に来韓した日本人にも共通してみられるのか、それとも異なりがあるのかを本報告を手がかりに検討していくことを目指している。現在では、経済的にどちらが優位か、社会経済の成熟度はどちらが進んでいるかといった点よりも、韓流ブームを通じた文化的イメージや政治的な日韓関係に基づくイメージに多くの関心が寄せられている。実際、21 世紀に入ると、在韓生活を扱った書籍は減少し、2000 年代後半ごろから「嫌韓」をテーマにした書籍が日本の書店を席卷するようになった。しかしこの数年でいわゆる「嫌韓本」は減少し、韓国芸能や文化への注目に再び変わりつつあるが、これは日本国内で求められる韓国情報の質が変化した証左ともいえる。一方で、個々の韓国生活に関する情報はインターネットで発信されるようになり¹⁰、韓国に対する相反するステレオタイプも創造されている。報告者はソウルを中心に韓流ブーム以降に来韓した在韓日本出身者 40 人以上に対する移住動機や移住後の生活に関するライフストーリーの聞き取り調査を行っており、今後それらの結果と総合して、日韓国交正常化後の在韓日本人の生活や価値観の変化を検討していきたい。

参考文献（表に掲載した分を除く）

【日本語文献】

- エドワード・サイード(1993)『オリエンタリズム』上下巻、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社
川端浩平(2020)『排外主義と在日コリアン—互いを「バカ」と呼び合うまえに—』晃洋書房
黒田勝弘(1983)『韓国社会をみつめて 似て非なるもの』亜紀書房
戸田郁子(2012)『悩ましくて愛しいソウル大家族』講談社
松樹亮子(2020)「在韓日本人の韓国文化受容意識と行動選択に関する一考察—インタビュー調査から—」
『日本文化學報』第 85 輯、pp. 193-219
四方田犬彦(1987)『われらが「他者」なる韓国』PARCO 出版局

【韓国語文献】

- 아사다 에미 (2009)『재한일본인 주재원 커뮤니티연구: ‘리틀도쿄’에 거주하는 부인들의 사례를 중심으로』2008 년도 한국학중앙연구원 한국학대학원 석사논문
임영언·이화정(2013)「한국거주 일본인의 문화적응 모형과 다문화적 수용태도 연구」『평화학연구』제 14 권 4 호, pp. 187-206

¹⁰ 報告者のインタビューでもカカオトークの「在韓日本人の子育てグループ」のグループトークの存在や、日本語の韓国情報サイト「KONEST」の掲示板などで必要な情報を入手したという語りを得られた。